

平成19年11月25日

第35号

# 素流協 News

平成19年11月25日発行・発行所 岩手県素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)  
TEL 019 (652) 7227 / FAX 019 (654) 8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

## 農林水産省実施 木材流通構造調査の結果概要

この調査は、木材流通構造の現状を捉えることを目的として5年に一度実施されているもので、今年度の調査結果が去る10月25日に公表されました。

その内容について国産材を中心に紹介します。

### ▽調査

全国の製材工場等を対象として(表)、平成18年12月31日時点で、過去1年間の木材の仕入先別仕入量、出荷先別出荷量について調査したものです。

表

調査対象	調査数
製材工場	695
合単板工場	140
プレカット工場	415
集成材工場	142
木材流通業者	1,538
木材チップ工場	400

### ▽素材の供給量

製材工場や合単板工場、市売市場、木材販売業者に供給された素材の量は、一三八四〇千 $m^3$ となっており、5年前(平成13年)と比較すると、製材・合単板工場への出荷量が増加し、六八一千 $m^3$ (5%)増えている。

出荷先は、木材市売市場への出荷がもっとも多く、次いで製材・合単板工場、木材販売業者となっている。(図1)

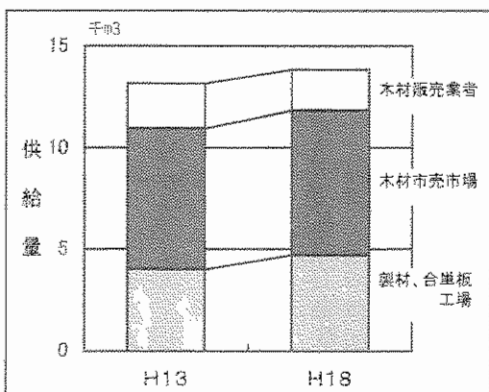


図1 素材の供給量

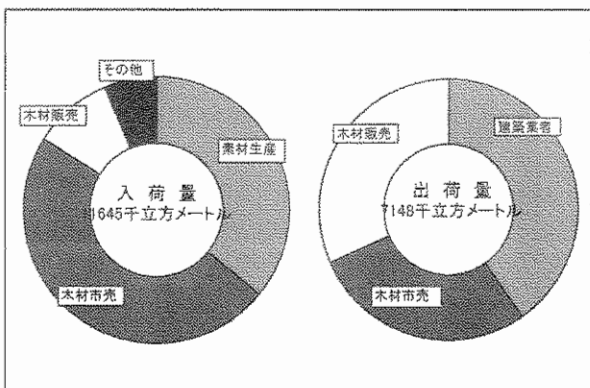


図2 製材工場の入・出荷量

なお、国産材の用材生産量に占めるこれら製材工場等への供給量割合が年度により変わらないものとする、平成18年の国産材の用材生産量は一七六二六千 $m^3$ (平成13の八六七千 $m^3$ 増)と推定される

▽製材工場の入・出荷量

製材工場への入荷量は、一一六四五千 $m^3$ で、木材市売市場が最も多く、次いで素材生産業者となっており、この2者で約85%となっている。

また、製材品の出荷量は七一四八千 $m^3$ で、出荷先は建築業者等が

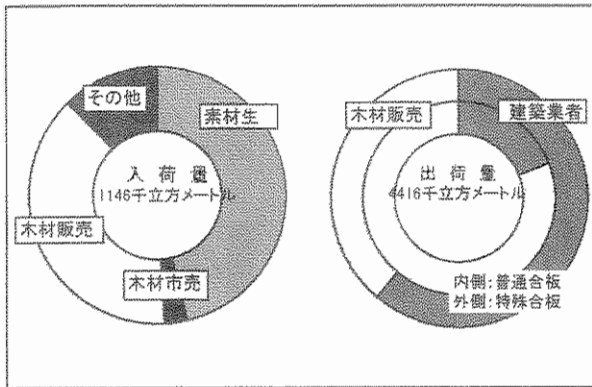


図3 合单板工場の入・出荷量

最多で、次いで、木材販売業者と木材市売市場が同程度となっている。(図2)

▽合单板工場の入・出荷量

合单板工場への国産材入荷量は一一四六千 $m^3$ で、合单板工場の人荷量五一八七千 $m^3$ の22%を占めている。

入荷先は、素材生産業者が最多で、次いで木材販売業者となっている。

合板の総出荷量は、普通合板三三二四千 $m^3$ 、特殊合板一一〇二千 $m^3$ 、計四四一六千 $m^3$ となっており、

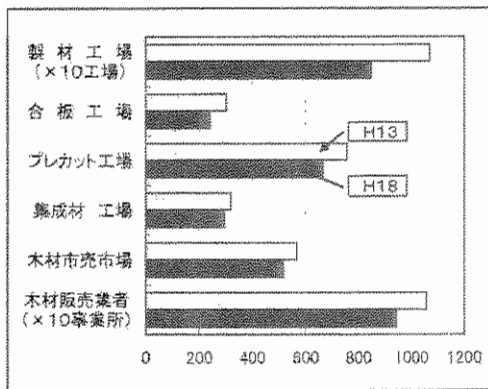


図4 工場数等の推移

5年前より普通合板が増加し、特殊合板が減少している。

出荷先は、普通合板は80%強が木材販売業者、特殊合板は、60%強が建築業者等となっている。(図3)

また、普通合板、特殊合板ともに、建築業者等への出荷割合が5年前より増大しており、需要者へ直接出荷する工場が増えたことを示している。

▽製材工場等の数(図4)

・製材工場：八四八二工場となっており、5年前より二二二二工場減少している。販売額の多い工場数は増加しているが、少ない工場数が大きく減少している。

・合板工場：二四〇工場で、5年前と比較すると、販売額の少ない工場が減少し、五八工場少なくなっている。

・プレカット工場：六六四工場で、5年前より九三工場減少している。販売額の多い工場数が増加し、少ない工場数が減少している。

・集材工場：二九四工場となっており、5年前より二五工場減少している。プレカット工場と同様の傾向となっている。

・木材市売市場：五一六業者で、5年前より五一業者減少している。販売規模の大きい事業者が減少し、反対に小さい事業者が増加している。

・木材販売業者：九四三〇業者で5年前より一一四八事業所減少している。販売規模の大きい階層と小さい階層では変化が無いが、中間規模の階層で減少している。

合板誕生一〇〇周年を記念して、合板に関する情報を集めた「木材・合板博物館」が東京都江東区新木場タワーに、10月20日にオープンしました。

木材・合板関連の展示、木に関する学びコーナーやものづくりコーナー、情報コーナー、シアターなどの設備を持った博物館です。

上京した際には、立寄ってみてはいかがでしょうか。

博物館のホームページには、素

「木材・合板博物館」の紹介

入館料：無料

開館時間：10時～17時

休刊日：毎週月・火曜日、祝日、年末年始

住所：〒136-8405  
東京都江東区新木場  
1-7-22 (新木場タワー)

TEL：03-3521-6600

流協のホームページからアクセスすることが出来ます。

# ウッドマイルズ講座 (4)

## 輸送による二酸化炭素の排出

### 5 ウッドマイルレージCO<sub>2</sub>

輸送手段(自動車や船舶など)毎の輸送距離に応じたエネルギー消費量によって排出される二酸化炭素の量で示され、具体的には、ウッドマイルレージに輸送手段毎の係数(表)を乗じて求められる。

ウッドマイルレージCO<sub>2</sub>は、県産材住宅や準県産材住宅では輸入材住宅よりも低い値となっている。

(図1)

このウッドマイルレージCO<sub>2</sub>は、輸送過程において、CO<sub>2</sub>排出量をいくらか削減できたかの評価を可能とする。

表1 CO<sub>2</sub>排出量

(kg-CO<sub>2</sub>/トン・km)

輸送手段		CO <sub>2</sub> 排出量
自	動 車	0.25
鉄	道	0.02
内	航 船 舶	0.04
外航 船舶	バルク船	0.0096
	コンテナ船	0.0207

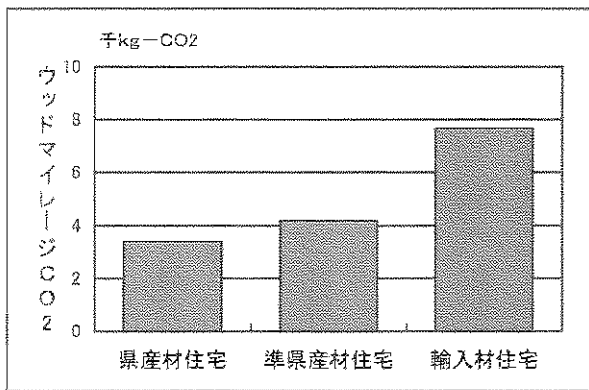


図1 ウッドマイルレージCO<sub>2</sub>

各住宅を通常流通している木材で建築したときのウッドマイルレージCO<sub>2</sub>の値を比較すると、県産材住宅や準県産材住宅では約四〇〇kg・CO<sub>2</sub>強削減されるのに、反対に輸入材住宅では約四〇〇〇kg・CO<sub>2</sub>強増大されることとなる。(図2)

これをガンリン使用量に換算すると、県産材住宅や準県産材住宅

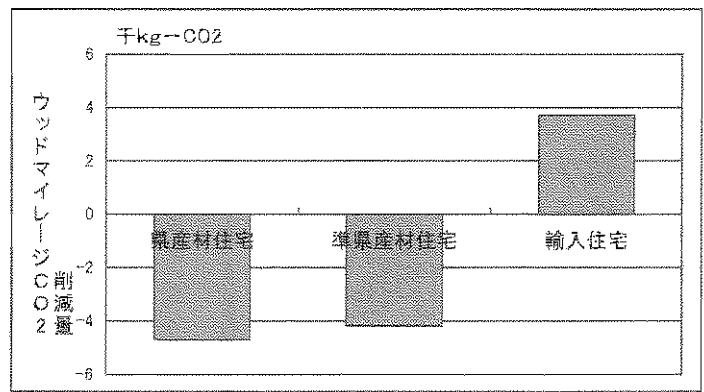


図2 ウッドマイルレージCO<sub>2</sub>の削減

では約一〇〇〇〜二〇〇〇リットルが削減され、輸入材住宅では反対に約一五〇〇リットル消費することとなる。

### 6 流通把握度

ウッドマイルズの算出は、山から原木市場、製材所といった木材流通の履歴がわからなければ、困難である。

しかし、木材の流通は依然として不明な部分が多く、使用した木材の履歴を生産された山までさかのぼることは不可能に近い。

のぼることは不可能に近い。

流通把握度は、木材の伐採地点から建築地点までの輸送経路において、推定値でなく正確に把握できるウッドマイルレージ値が全体のウッドマイルレージ値に占める割合で示され、木材流通経路の把握の度合いを表す指数である。

ウッドマイルレージ値が同じでも、流通把握度という視点を加えることによって、トレーサビリティ(追跡可能性)という側面からの評価が可能となる。

今回調査の各住宅における流通把握度を算出すると、県産材住宅平均50%(25〜71%)、準県産材住宅60%(44〜75%)、輸入材住宅6%となり、輸入材住宅の値が小さくなっている。

▽木造住宅を近くの山の木で建設することによって、木材輸送で排出される二酸化炭素の量を削減することが可能である。

その削減程度は、輸送距離だけでなく、輸送手段により大きな影響を受けている。

# アイドリング ストップに ご協力下さい

合板工場より、丸太搬入の際、アイドリングストップをお願いしたいとの連絡がありました。

つきましては、グラップルやユニックを使用していない時のトラックの駐停車時には、極力エンジンを止めるようお願いいたします。不必要なアイドリングを止めれば、燃料の節約ができ、排ガスも減らせます。

みなさんのご協力をよろしくお願ひいたします。

# 一葉

## キャスビー(CASBEE)

キャスビー(CASBEE)とは、「建築物総合環境性能評価システム」の英語綴りの頭文字をとった略称で、国土交通省の主導のもとに、産官学共同プロジェクトにより開発されたものである。

建築物を環境負荷と環境品質・性能で評価し、環境性能効率(BCPビー)という評価指標で格付けする手法であり、建築物の環境への影響を、数値化して客観評価できるようにしたのが特長である。

具体的評価は、空調の効率性、防音、節水性など建物自体が持つ

### 環境性能効率と評価項目

<b>環境性能効率 (BEE)</b> (建築物の環境品質・性能) = (建築物の環境負荷)
<b>環境品質・性能</b> ・室内環境を快適・健康・安心にする。 ・長く使い続ける ・町並み・生態系を豊かにする
<b>環境負荷</b> ・エネルギーと水を大切に使う。 ・資源を大切に使い、ごみを減らす ・地球・地域・周辺環境に配慮する。

環境品質・性能の項目と大気汚染、騒音、振動、悪臭、日照障害、排熱など建物が周囲の環境へ与える環境負荷の項目の六分野、五項目について、五点満点で採点され、BEE値により五段階にランク付けされる。(表参照)

評価が高い住宅とは、快適・健康

康・安心で長く使い続けられる性能が備えられており、エネルギーや水を大切に使い、建設時や解体時にできるだけゴミを出さないように環境負荷を減らす努力をしており、良好な地域環境形成に役立っている住宅である。

建築確認の申請時に、建築主がキャスビーを自己採点して行政へ届出ることを義務付けるなどの動

## 冗談欄 「絆」が「忍」へ

11月22日は、語呂合わせから、「いい夫婦の日」なそう、夫婦を漢字一字で表現すると、若い夫婦では「絆」や「愛」で、年配夫婦では「忍」や「縁」になるそうである。

夫婦円満の秘訣は、積極的に会話することであるが、会話時間は、若い夫婦の半数が1日に2時間以上なのに、年配夫婦では、半数近くが30分以下となっている。

会話時間が30分以下になると、夫に愛情を感じない妻の割合が急増し、離婚を考えたことのある割合も増えている。

る割合も増えている。

妻の愛情を呼び戻す言葉は、「愛してる」「好き」などよりも、「有難う」なそうである。

旅行に行くなら友達と、あの世へ行くのは夫が先と思っている奥さんに、年金がもらえるようになった途端、熟年離婚を突然申し出られないように、常日頃から話をよく聞き、感謝の気持ちを忘れない心がけをしてほしいものです。

母さんと

呼ぶなアンタを

生んでない

きが、大都市を中心に出てきています。

### 岩手県ホームページより

## 「県民参加の森林づくり促進事業企画」を追加募集

県民の主体的なアイデアと参加による森林づくり活動や森林整備活動について企画を追加募集します。

### 募集締め切り

平成20年1月15日(火)

### 提出先

広域振興局、地方振興局等の林務担当部署  
 ・補助率と補助限度額  
 ・十分の十以内、原則として百万円以内

### いわての森林づくり推進事業の概要 (H19年11月現在)

<b>いわて環境の森整備事業</b> (656,707千円) 112施行地、867.81ha
<b>県民参加の森林づくり促進事業</b> (15,000千円) 19団体、19事業、森林所在地12市町村
<b>事業評価委員会</b> (3,975千円) 5回開催

平成19年10月分の販売実績

- 1 合板用の会員生産は、先月よりスギの出荷量が減少し、約350m<sup>3</sup>少ない約7,250m<sup>3</sup>となった。樹種別割合は先月と近似しているが、出荷先割合は先月より10%弱ホクヨープライウッドが増大し、北日本プライウッドが減少している。なお、一関市大東町のストックヤードの取扱量は、522m<sup>3</sup>となっている。また、システム販売は、先月より約600m<sup>3</sup>多い、約2250m<sup>3</sup>の出荷量となっている。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は、先月の1.7倍の約640m<sup>3</sup>となっている。
- 3 年間計画画量に対する10月までの累積出荷量の割合（目標達成率）を、10月までの目標達成率58%と比較すると、合板用の会員生産はほぼ順調に進捗しているが、合板用システム販売とその他の出荷が大きく下回っており、全体での達成率を10%程度引き下げている。  
(m<sup>3</sup>, %)

区分	出荷者	樹種	長級	販売先				累計	割合		目標達成率	19年度計画量
				ホクヨープライウッド	北日本プライウッド	その他	計		長級別	樹種別		
合板用	会員生産	スギ	2.0	1,985	1,531		3,516	26,861	63.8	56.6	125,000	
			2.1		70		70	1,629	3.9			
			4.0	676	638		1,314	13,608	32.3			
			計	2,662	2,239		4,901	42,097	100.0			
		カラマツ	2.0	866	125		981	12,441	84.7			
			2.1	264			264	1,295	8.8			
			4.0	70	2		72	950	6.5			
			計	1,190	127		1,317	14,686	100.0			
			アカマツ	2.0	882	119		1,001	12,756			91.7
				2.1								
	計	2.0										
		2.1										
		4.0	13	6		19	1,160	8.3				
		計	895	125		1,021	13,917	100.0				
システム販売	スギ	2.0	2,083	83		2,167	5,080	85.2				
		2.0	34			34	717	12.0				
		2.0	34			34	158					
		計	2,158	83		2,241	5,951	100.0				
	計	6,905	2,574		9,479	76,662						
その他	スギ	2.0			290	290	2,393	61.9				
		2.0			347	347	1,333	34.5				
		2.0					139	3.6				
		計			637	637	3,865	100.0				
合計		6,905	2,574	637	10,116	80,527	48.8		165,000			

落穂拾い

▽わが国の森林資源は、森林面積の約四〇%を占める人工林の蓄積が順調に増加しているようであり、また木材としての成熟度が高まってきた結果なのか、「国産材時代の到来」という声が澎湃と沸き起っている。

戦後積極的に植栽された人工林は、その主要な植栽樹種が杉、桧、唐松等の針葉樹であり、標準伐期齢五〇年前後の短伐期施業によって行なわれてきた。

その結果、現在、植栽時期の早かった人工林は伐期を迎えており、そのあとには沸き起こるようには間伐を必要とする人工林が続いている。この現象を見て、「こいつは、いけない！」と、一転して複層林や長伐期林への移行を笛太鼓で奨励し始めた。間違いに気付いたら直ちに改めるのは、大切なことである。ただし、間違ったことの原因を究めてしっかりと認識することがより重要なことである。

二度と同じ間違いをしないためである。

最近、ある林業雑誌を読んでいたら、先に述べた、現在も認知さ

れている「標準伐期齢」を決定した理由の根拠は実は希薄なのだ、と書かれていた。

その部分の記述の要旨はこうなのである。

〈標準伐期齢は、材積収穫を最多とするような収穫時期を定めることが効率的であるという理由がそのベースになっている。……：……ところが（調査によると）杉や桧の材積成長量は六〇年生を過ぎても低下せず、高齢になっても良好な成長を維持していることが指摘されている。……：……「標準伐期齢」を定める時に或る理論が大きな影響を与えている。その理論は「最終収量一定の法則」で、これはもともと農作物の栽培実験から得られた発想であり、植栽密度に関係なく十分に時間が経過すると単位面積当たりの植物体量は最大となり、どの植栽密度でも同じ最大値に達するというものである。単年生農作物と樹木のような永年性植物とは組織器官が大きく違うのであり、この概念を森林に適用したのが過ちの要因であった。〉

森林経営学における重要な概念「標準伐期齢」が何と安易な理論に依拠していたのか！